

増上寺徳川家霊廟の風景（2）

台徳院惣門の風景

南霊屋奥院について概観した後で、今回は惣門から台徳院霊廟を訪れてみることにする。



写真1 絵葉書「東都六大公園之内芝山内」（筆者蔵）

まず1枚の絵葉書を見て頂きたい。「東都六大公園之内芝山内」と題された絵葉書である。右手に門、石灯籠が並び左の端にも門の様な建物が見える。右端の門は形状から惣門の様に思われるが決め手がない。注目されるのは左端の門の様な建物の前にある銅像である。

明治40年刊行の『東京案内』の「芝公園之図」には惣門の正面左に「小菅大佐銅像」と書き込まれている。

小菅大佐をインターネットで検索してみると『日本の銅像ギャラリー』の中に「軍需物資として撤去されてしまった幻の銅像の紹介」という項目があり、その中に「幻

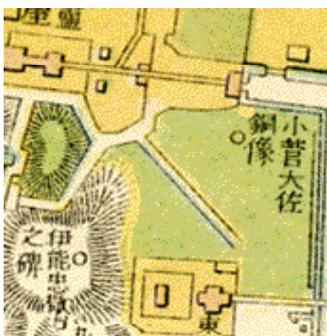


図1 『東京案内』の付図より

の銅像」として紹介されているのが判った（写真2）。

同じく『測量人の風景』というサイトの「地図測量人の像」には「測量人の風景初代陸地測量部長 小菅智淵（現存なし）」として写真3が掲載されている。

像の主は小菅智淵大佐(1832-1888)で女子美術大学の創始者として知られる藤田文蔵(1861-1934)が1899年に制作した物であることが判っている。

小菅智淵大佐について少し触れておきたい。小菅智淵は、天保3年(1832)幕臣関定孝の次男として生まれ後幕臣小菅豊の養子となる。昌平黌で学び、講武所の砲兵頭取。戊辰戦争では、榎本武揚らとともに、五稜郭で最後まで戦った。

維新後新政府に招かれ明治12年参謀本部測量課長となり「迅速測図」の作製に尽力し、明治21年(1888)陸地測量部の発足に際し初代の陸地測量部長となった。しかし同年12月視察からの帰途名古屋で病に倒れ帰らぬ人となった。



写真2 「日本の銅像ギャラリー」

写真3 『測量人の風景』

芝公園内には既に明治22年に東京地学協会により「伊能忠敬測地遺功表」が建っており、その傍らに銅像が建てられたことは小菅智淵にとっては測量人としての誉れであり、また二代将軍の墓前惣門の前は幕臣としての最後のご奉公の地であったに違いない。

改めて写真2,3から写真1を見れば台座の具合も地図を持つ右手、サーベルに手を伸ばす形からほぼ同一の像と断定できる。となれば写真1の右端の門は惣門であり、左端の建物は勅額門であることがわかる。

注目したいのは惣門の左手が大きく開かれていて、勅額門前まで自由に出入りが出来そうな点である。

前にも紹介した明治三十四年の『大日本東京芝三縁山増上寺境内全図』から関連部分を拡大してみると、銅像とその周辺の様子が丹念に描かれて居るのが判る。だが明治30年に刊行された『風俗画報 東京名所図会芝公園之部 上』には増上寺を含む芝公園内の様々な風景、建物、記念碑が紹介されているのに、この小菅大佐の記述はない。

既述のように銅像は1899年に制作されていたから、この時期に『風俗画報』の中に記述がないのは当たり前だが、もし記述されていれば「幻の銅像」と云われた小菅大佐の銅像に関して詳細な記載を得られたに違いない。残念なことである。

『大日本東京芝三縁山増上寺境内全図』でももう少しこの周辺を見ておきたい。図の左端の中央通り沿いに「御鷹門」が描かれて居る。写真4は大正2年に東京への修学旅行の際に増上寺で買い求めたと裏書きのある絵葉書で「(芝公園地) 東照神君御鷹門」のキャプションが付いている。写真をよく見ると、すぐに鳥居がありそ

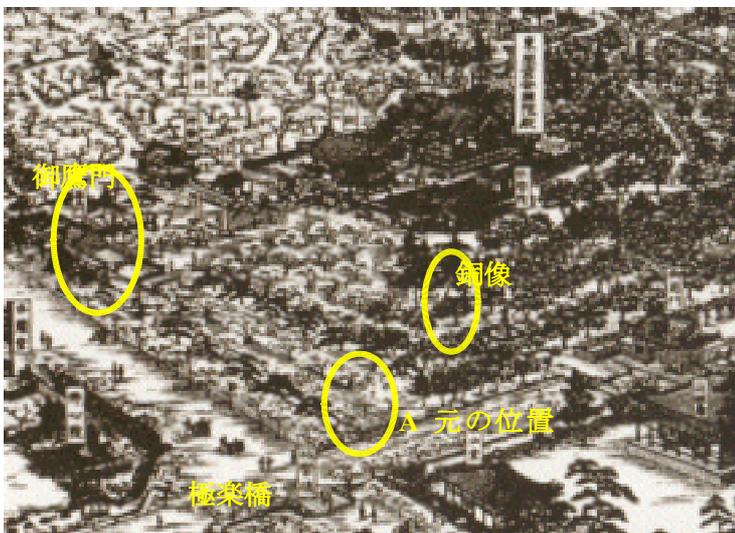


図2 「大日本東京芝三縁山増上寺境内全図」



写真4 絵葉書「(芝公園地) 東照神君御鷹門」(筆者蔵)



写真5 『幕末明治期写真資料目録Ⅰ』



写真6 『古写真から見る江戸から東京へ』

至れば赤羽川に架する鉄橋あり。之を芝園橋といふ。」とあり付属の地図には芝園橋際の一部が取り払われ「廿六年十一月市区道路改正引払」と書き込みがある。

『港区史』掲載の史料「明治二十二年五月二十日 東京府告示第三十七号 市区改正道路」には

第十七 内幸町新架橋ヨリ桜田本郷町南佐久間町及芝公園芝園橋三田四国町等ヲ経テ本芝四丁目ニ至ルノ路線 幅員 同上(十五間)

とあり、架橋以降順次大規模な道路と周辺の整備が行われていったことが伺える。

さてそういった明治期の周辺状況を踏まえながら古写真の中の惣門の風景を見てみたい。写真7見るように惣門正面右手に堀が有り、門の前でコの字に曲がって左手に流れていく。御成道はだから惣門の前で小さな橋を渡り惣門へ続いて行く事になる。撰門の『縁山志』には増上寺内には極楽橋を初めとして7つの橋があるとして、書き上げがあるが、この橋の記載はない。極楽橋は図2の下に描かれており、『縁山志』には「三門の前南にあり安国殿台徳院殿へ参拝の公卿諸侯下乗の所なり此の橋名は寛永三寅年より名つけしとなり」と記載されている。

千秋文庫が所蔵する『享保年間彩色大絵図』(以後『千秋文庫絵図』)にはこの辺りの風景が良く描かれて居るが御成道は極楽橋を渡って安国殿の鷹門に行き当たり、右に折れて惣門に至ることになる。

極楽橋は「極楽橋石堅三間半横二間一尺」とあり、惣門前の石橋は「石橋松平丹波守上此」とあり、「豎二

の後ろに石段が有るのが判る。配置から図2の御鷹門の状態を写し出していることは明らかである。しかしこの「御鷹門」は本来図2のAの位置にあったもので「江戸名所圖會」の絵にも、惣門前左手の御鷹門から鍵の手に拝殿まで達する参道が描かれて居る。

写真5は東京国立博物館の『幕末明治期写真資料目録Ⅰ』に「増上寺安国殿御鷹門」として掲げられた写真だが、参道敷石の位置から安国殿敷地内側、御鷹門を背後から撮った写真だと判る。

また『古写真から見る江戸から東京へ』の中に「不明」として掲げられている写真は、御鷹門であるのは間違いないが、写真左側門の内側から大きくせり出した松の枝の形状から、御鷹門がまだ元の位置に在った時に撮られた物であることが判る。恐らく神仏分離で、東照宮を増上寺から引き離す目的と、芝公園地の整備の中で、御鷹門の位置を通りに面した位置に移し、惣門前の左側の築地や石垣を壊して、写真1に見られるような開放された空間を作り出すことになったものと思われる。

明治17年、小菅大佐が係わった「迅速図」では「御鷹門」は元の位置に描かれて居り、前記明治30年発行の『風俗画報』でも「鷹門」の位置を「東照宮の北一二町の処に在り」としている。従って明治30年以降明治34年に図2が描かれた時までには移動が完了した物と思われる。

実は惣門前の風景は、三門前から今の芝園橋を抜けていく道筋の整備により大きく形を変えていく。

芝園橋の架橋年代については『港区史』は不明としているが、明治12年1月出版の「東京府蔵」版の地図には見られない橋が前記明治17年の「迅速図」には描かれて居る。

村上博了氏の『増上寺史』には

翌(明治)十一年七月三十一日には山下谷隆崇院、瑞華院両院間に道路を通じ赤羽川に架橋し新堀との便をはかり、また静観院宮御墓裏から飯倉町に通ずる小路は巾三間道路にひらかれた。

との記述があります。

隆崇院、瑞華院は芝園橋の架けられた古川の岸に位置し、謂わば川への道筋を塞ぐ形になっていた増上寺の子院である。明治十一年七月三十一日が実際の架橋年月を示しているのか明白ではないが、ほぼこの時期に芝園橋の最初の架橋が行われたと考えて良いと思われる。何れにせよ、この2寺院の一部を切り開き川への道筋を付けたことで、増上寺・芝公園周辺の往還の環境は大きく変わる事となった。

『風俗画報』には「東照宮の前南北に通ずる大道を南に



写真7『幕末明治期写真資料目録Ⅰ』

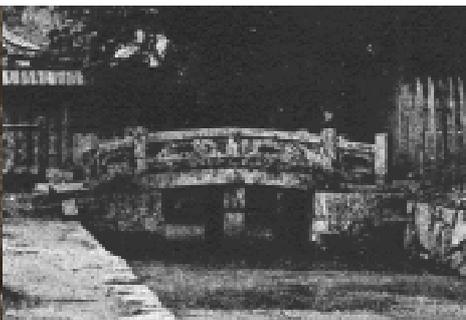


写真8『東京景色写真版』

間横九尺五寸」との記載がある。「松平丹波守」は当初台徳院殿御霊廟が建てられた当時の信濃松本藩主松平(戸田)丹波守康長(1562～1632)かと考えてみたが、『寛政重修諸家譜』の播磨明石藩主松平丹波守光重の項に「(承応)三年さきに台徳院殿御廟及び門屏等修造のことをうけたまはりつとめしにより、家臣等に物をたまふ。」と有り、『厳有院殿御実記』承応三年八月の項にも同様の記事が見える。また台徳院の承応三年の棟札には「奉行 従五位下 松平丹波守藤原光重」とあるのでこの「松平丹波守」は松平康長より2代後の松平光重と考えておきたい。

写真1にも正面左手の築地が残っており、『大日本東京芝三縁山増上寺境内全図』からも写真7の状態を残して左手奥の築地塀は取り除かれて了ったものと思われる。



写真9『古写真で見る江戸から東京へ』



写真10 拡大写真

もう一つ惣門正面の風景について注目してみたいのが、この堀に掛かる橋である。写真8の橋は写真7と同じ物だが、明治29年刊行の『東京景色写真版』の一部を拡大したものである。

次に写真9を見て頂きたい。此の写真は『古写真で見る江戸から東京へ』(小沢健志、鈴木理生監修)中で「増上寺黒本尊」としてキャプションが付けられた物だが、惣門を写したものである。

問題はこの写真の右端に写っている橋である。明らかに写真8の石橋とは違って石の橋脚も無く、木の橋の様に思われる。大きくせり出した石の架台も取り払われている。

この程度の石橋が簡単に損壊したとも思われず、やはり維新後の寺域の整理による物かとも思われる。

少し周辺の事情にこだわりすぎたかも知れないが、明治維新を迎えて、不易の霊場も大きく姿を変えて行くこと



写真11『幕末明治期写真資料目録Ⅰ』

ことになる。写真資料はその僅かな間の変化を美事に捉えて居り、私達の力不足で貴重な資料を「不明」として見過ごすことは出来ない様に思われる。

惣門は現存するものであり、近年の修復の中で多くの記録も残されていないから建築の詳細に就いては田辺泰氏の『徳川家霊廟』から簡単な記述を拾っておくに留めたいと思う。

惣門は台徳院霊廟第一の門にして、構造形式は八脚門、屋根入母屋造、銅板葺である。柱間寸尺は正面中央間十三尺、左右間 各々八尺七寸、側面柱間は各十尺宛である。全体朱塗、手法は和様にして、頭貫を通し、斗拱間には各間斗束を立て、中央入口頭貫上部には臺股を設けているが、その左右の肩は肘木を兼ね斗を載せ、臺股と平三斗とを兼ねた異形の意匠である。尚中央の間に設けられた兩開扉は朱塗の板唐戸で、八双金具を付した跡がある。

檼は二重繁割、天井は化粧屋根裏にして、朱塗の檼を現はし、内部頭貫上には板臺股を設置している。屋根はこの門の意匠上最も特徴をもつ部分で、正面中央に唐破風を立てている為め、かえって遅重の威あるものとなっている。



海前寺門前の灯籠

(上竿) 奉獻 石燈籠貳箇
台徳院殿 尊前
慶安四年辛卯 七月日
(下竿) 從四位下有馬中務少輔 源朝臣忠頼



聖天院の奥院丘上



聖天院の本堂前

修復された惣門は、移される前の御鷹門の近く、通り沿いの位置にまで出ているので、台徳院霊廟の全体像が掴みにくくなってしまったが、港区によって惣門、勅額門の位置が通路上に復元されているので、少し小高くなった復元位置から想像力で高さを補ってみれば、丸山からの小高い丘の連なりを背後に負って、緩やかな勾配で惣門、勅額門、御霊屋

御鷹門前 (剥落)	波侍従源朝臣忠鎮 敬白	寛永九壬申年七月二十四日	(下竿)	石燈籠	台徳院殿一品大相國公 奉拜獻	(上竿)	石燈籠	兩箇
--------------	----------------	--------------	------	-----	-------------------	------	-----	----

中門へと続いていく風景を偲ぶことも出来そうだ。

写真11は惣門を背後から写した物で、門の左右に諸大献上の石灯籠が勅額門の前まで連なっている。

石灯籠の配置については、「千秋文庫『増上寺絵図』の世界」に詳細を記しているのだから今は省くことにして、惣門左右に写り込んでいる一際大きな石灯籠について記しておきたい。

門の左右一番奥手が筑後久留米そのうちの1基が茅ヶ崎市の海前寺に現存する。残念ながら他の1基の所在は判っていない。

その石灯籠の1つ手前にやはり左右に並んでいるのが、阿波淡路渭津藩主蜂須賀阿波守忠英(忠鎮)(1611～1652)の献上した石灯籠で、現在は日高市の聖天院の本堂前と奥院の丘の上に建っている。参考までにそれぞれの銘を掲げておく。

こういった事実を1枚の写真の裏付けの資料として出せるのも、『千秋文庫絵図』が、石灯籠の配置を絵図という形で明瞭に残しているからに他ならない。

分散してしまえば、1個の石造資料に過ぎないが、歴史の背景の中に置き直してみると、重みと深い由緒を感じられるから不思議なものである。

写真15は惣門の内側から門を背にして、勅額門を写したものである。

中央階段の手前に見えるのが加藤式部少輔明成(1592～1661)の献上した銅灯籠で、左側にももう1基配置されて居るはずである。

右側やはり背の高い石灯籠は筑前福岡藩主黒田忠之(1602～1654)の献上した石灯籠でこれも左右2基。ただし加藤式部少輔明成の物も黒田忠之の物も何れも現在まで確認されていない。

特に黒田忠之の灯籠は写真の位置からして推測できるだけで、絶対の根拠はない。

但し、国会図書館蔵本の『台徳院御霊屋献備御灯籠記』にも

奉拜進 台徳院殿尊前 石燈籠 兩基
寛永十一甲戌年四月二十四日 筑前侍従忠之敬白

の記述があるので、この位置に2基献上している大名、しかも前出の有馬、蜂須賀と並ぶ大藩大名と考えれば、まず間違い無いと思われる。

惣門の周辺と惣門内部までを概観し、最後に修復成った惣門の写真掲げて、この稿を終わりたいと思う。

藩主有馬中務少輔忠頼(1603～1655)の奉獻した燈籠で、

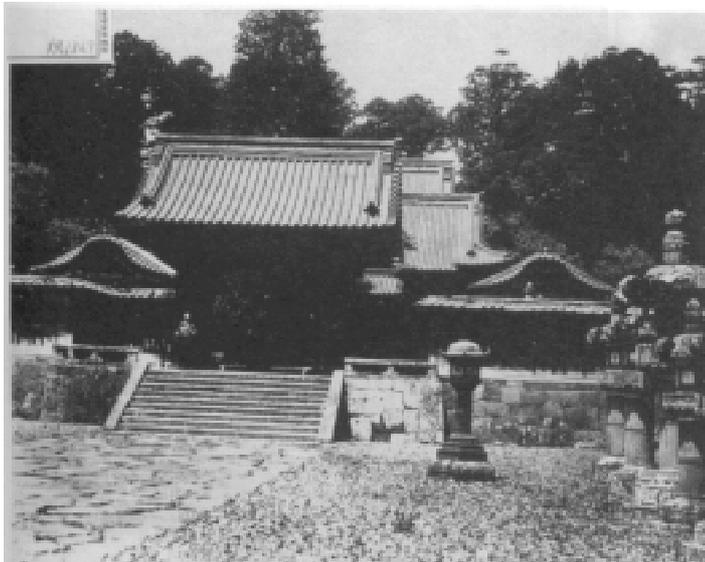


写真15『幕末明治期写真資料目録I』



写真16 修復後の惣門